

## 平成27年度 第3回北関東救急看護研究会

### 発表概要

テーマ：急性増悪を来した非がん疾患患者とその家族における終末期ケアの実際

話題提供者

公立大学法人横浜市立大学附属市民総合医療センター

急性・重症患者看護専門看護師兼看護師長 小幡祐司

がん以外の領域における、治療が奏効しなくなった終末期患者や、慢性疾患を抱えて終末期を迎える患者へのケア（End Of Life Care）が重要視され、慢性疾患ごとの経過や、出現する症状の違いを踏まえた患者の苦痛の緩和、QOLを高めるケアが求められている。しかし、対象となる患者の高齢化が進み、非がん疾患による痛みや呼吸困難などの苦痛緩和は十分に行われていない現状が報告されている。また、高齢者においては、死因の多くが「悪性新生物」「心疾患」「肺炎」などの慢性疾患であり、多くの高齢者は慢性疾患とともに生き、慢性疾患のケアを受ける期間が End Of Life Care と重なる特徴が挙げられている。

今回、膠原病を発症し急性増悪を来した患者とその家族との関わりを振り返り、非がん疾患患者の終末期ケアについて検討した。

患者は非がん疾患を発症し、症状は緩解するであろうという期待を抱く中、急速に進行する症状を自覚し不安を抱えていた。さらに、病とともにライフスタイルの変化、発達段階における役割遂行が困難になっていくといった様々な危機的状況に直面していた。状態が悪化していく患者を目の前に、家族、そして医師・看護師が、それぞれの立場で様々な思いを抱いていた。しかし、急激な病状の悪化を来し、死の転機を辿るかもしれないという危機に直面した患者への向き合い方が分からない状態であった。そこで、患者と家族、医療者は、症状悪化に直面しながら、「改善して欲しい」という思いや、「死が迫りくる不安」といった期待と苦悩の間の揺れ動く思いを共感した。そして事実と向き合い、患者・家族が思いを伝え合うことができるよう調整を図りつつ、在宅調整が可能となった。

End Of Life Care とは、患者と家族が自身の持てる力を発揮して、変化していく状況の中で生きることを支える必要があるとされている。また、人間としていかに生きるべきかを自分自身に問うものであり、「自分らしく最期まで生きる」「自分にとって本当に大切なものとは何か」を考えることが必要とされている。すなわち、死に直面した患者・家族が生と死の狭間で、今ある時間を生きること意識を向けられるような支援が End Of Life Care の基盤になると考えられた。

さらに、End Of Life Care を実践するにあたり、終末期の患者と係る頻度の少ないジェネラリストに対して、看護ケアの意味付けを行うために「ナラティブの会」として、事例を振り返る機会を

設けた。ナラティブの会では、ジェネラリストの自由な語りを促し、患者・家族との関わりの中で感じた素直な思いの言語化を促し、看護師としての気づきが実践につながるよう、ファシリテーションを行った。この取り組みは、経験知から形式知へと変換していくためのきっかけとなり、日々の看護ケアにおいて、患者・家族の思いを汲み取った看護ケアを実践したいというジェネラリストの行動変容につながると考えられた。

私達は、日々患者・家族との関わりを通して、生命の危機的状況にある患者のケアに携わることが多い。迫りくる死を意識せざるを得ない状況の中で、患者にとっての最善を考え、患者と家族と向き合い、どのような厳しい状況であっても、患者の生活支援者として、生きることを支えるケアを探究していきたい。

(事例検討において、個人が特定されないよう配慮し、情報提供させて頂く旨の了解を得ている)